

往馬谷からフィールドワーカー

生駒高校地歴部・解放研

往馬坐伊古麻都比古神社（生駒市老分町 1527-1）

地歴部

由緒（神社庁平成祭礼から）

古い書物や古文書によると神社名は、往馬坐伊古麻都比古神社、胆駒社（いこましゃ）、往馬大社、生馬大明神、生馬八幡宮、行馬社、生馬神社、生駒大宮、等多様であるが現在は往馬坐伊古麻都比古神社と往馬大社の二通りに称している。

御祭神

伊古麻都比古神（産土大神）、伊古麻都比賣神（産土大神）、気長足比賣尊（神功皇后）足当仲津都比古神（仲哀天皇）、譽田別尊（応神天皇）、葛城高懸姫尊（神功皇后の母君）気長宿称王尊（神功皇后の父君）、この他にも境内に摂社十四社、境外に摂社六社が合せ祀られている。



例祭（火神祭） 10月10日、現在は10日に一番近い、日曜日
※展示の写真は、フィールドワーク時のものです。

神社の歴史

神社の正確な創立年代は明らかではないが、大神神社や石上神宮と同じように生駒山を神体



山（御神体）として祀られた日本で最も古い形態の神社で、おそらくこの生駒谷に人々が住み始めた太古の頃から生駒地方の守り神としてこの地に存在したと考えられる。歴史書物の中で往馬大社に関する最も古いものは、『総国風土記』の中の「伊古麻都比古神社、雄略三年（四五八年）」とある。また、正倉院文書の、『大倭國正税帳』（七三〇年）や『新抄格勅符抄』（八〇六年）にもその記載が見られ、奈良時代より崇敬厚き神社であった。更に『延喜式』（九二七年）には「往馬坐伊古麻都比古神社二座

并大月次新嘗」とあって、当時の日本全国の官社（二、八六一社）の中でも最高位の官幣大社（案上幣、一九八社）に列せられていた。当社の御祭神は本来、伊古麻都比古神、伊古麻都比賣神の二柱で、その後鎌倉時代の八幡信仰の隆盛に伴い五柱の神を合祀して、本殿御祭神は現在の七柱となった。

火燧木（ヒキリギ）の神

平安朝の書物である『北山抄』や『元要記』、『亀相記』等には「火燧木神」の記載が見られ、伊古麻都比古神、伊古麻都比賣神は古くから火の神としても尊ばれていた。我国最大の祭祀で



あり、歴代天皇の御即位の大祀である踐祚大嘗祭に用いられる火燧木は、代々往馬大社より献上したもので、今上陛下の大嘗祭にも、橿原神宮で行われた紀元二、六〇〇年祭にも当社の火燧木が御使用された。このような歴史の元に、毎年十月十日十一日の両日に執り行なわれる往馬大社の御例祭（火神祭）は壮大な火祭として、市内近郊はもとより遠方からも多数の参拝者があり、また古くから龍田大社の風神祭、廣瀬神社の水神祭と共に朝廷の深い信仰を受けてきた。

往馬神社の火祭り

古くから火の神として崇敬され歴代の大嘗祭に用いられる火きり木（うわみず（みぞ）桜）を献上している。10月の例祭は壮大な火祭りとして、古来より“龍田の風神祭”、“広瀬の水神祭”ともに深い信仰を集めている

生駒山頂を真西に拝する龍田川西岸に鎮座する。生駒山は大和の西側の垣である。この山系は北は交野台地、南は大和川を経て葛城金剛に連なる。生駒山の巨魁が見えるが、頂上には鉄塔など建物が見える。神奈備山とは思えない。

生駒山をこのあたりから見ると宝山寺の般若窟が突起になって良く見える。聖天さんである。延宝6年（1678年）の開山である。元々は巨石信仰の地で、役小角、空海修行の地と言われる。聖天さんは商売繁盛に御利益があるとも言われ、また歓喜天象鼻天とされ、和合、福利、嫉妬を司る生殖神とも言われる。大根を二本交差した「違い大根」が紋である。

往古、物部氏がこのあたりの支配者であった頃には、饒速日命か御炊屋姫が祀られていたのではないかと。宝山寺には鳥居がある。般若窟はサネ。

社叢と生駒山、宝山寺の般若窟（中央の突起）



往馬神社周辺について

魏志倭人伝の邪馬台国官は伊支馬、次官に弥馬升、弥馬獲支、奴佳ていと記載されている。谷川健一氏の白鳥伝説（小学館）では伊支馬は伊古麻（生駒）、弥馬獲支は御真木入彦（崇神天皇の名）、弥馬升を孝昭天皇の観松彦香殖稻に、奴佳ては額田とされている。いずれも河内、大和に由縁のある地名である。伊支馬には活目入彦五十狭茅（垂仁天皇）とも想定される。

また社の説明のように生駒山を神体山とした日本で最古の形態の神社であったとすれば、生駒の地と結びつきの強い鳥見の長髓彦や物部氏との関係も考慮しておく必要がある。

また平群氏が支配した地域でもある。奈良平野に都のある時代には、瀬戸内海へ出る道筋として生駒越えが利用された。奈良時代には高見烽（飛火、狼煙）が南の高安山から生駒へ移された。万葉に「神さぶる伊古麻高嶺」、住吉神代記に「胆駒神南備山本紀」などあり、古代人の信仰の山であった。山から流出する水の恩恵を祀る自然崇拜に始まったとされる。北上し天



野川になる。この川の流域には住吉社が続く。当社は住吉神の隆盛に押されて、特に中世の武士の台頭によって住吉神から八幡神へ変貌し、土地の神である二神は形跡を辛うじて留めていたようである。現在は主神に復帰している。

竹林寺

竹林寺は生駒神社の森から南方数百メートル、壱分の駅から生駒の山麓へ少し登った所の生駒市有里町に在る。木造薬師如来立像（国重文）ほか諸仏が安置されている。

行基の開祖と伝えられており、また行基が文殊菩薩の化身とされており、文殊の霊場である五台山の大聖竹林寺にちなんで大聖竹林寺と呼ばれている。国史跡となった行基の墓所が境内の東端にある。また境内から1235（文暦二年）年八月二十五日に、行基の舍利瓶が発見されている。西墓には忍性の墓が在る。東端部分には生駒谷唯一の前方後円墳である竹林寺古墳が存在している。



ハンセン病を考えるー北山十八間戸・西山光明院をもとめて

解放研

ハンセン病とは、どのような病気か

ハンセン病は、細菌による感染症の一種で、らい菌(Mycobacterium)という細菌が体内に入り込み増殖することで引き起こされる。主に体内の末梢神経が侵されることによる知覚まひ、運動まひなどが生じ、手足や顔に皮疹、結節(こぶ)が出来たり、眉毛が脱落したり脱毛したりする、いわゆるハンセン病特有とされる症状が引き起こされたりする。らい菌は人間の神経と親和性が高いため、簡単に神経の中に入り込む。また、らい菌は比較的温度の低いところを好むため、人体の中でも手足の先や鼻、目、耳などの部位の末梢神経で増殖しやすい。そのため、他の病気に比べて外見からみて分かりやすいところに変化が生じるため、「癩にかかると指が腐っておちる」「鼻が溶けてなくなる」などと呼ばれ、差別の原因になってきた。(ただし、これらは神経障害が引き起こす二次的な症状であって、いわば後遺症に過ぎない。)ハンセン病は、極めて進行の遅い病気の一つとされている。ひとつのらい菌が分裂するには数週間かかる。他の病原菌、例えば赤痢菌やコレラ菌は約1時間に1回分裂し、1つの細菌がたちまち数百万個にも増えて病気を引き起こすことを考えると、らい菌による病気は極めてゆっくり進行する。感染しても、体内で菌が増えて実際に症状として現れるまでに平均数年、ときには数十年に及ぶ長い期間がかかる。そして、発病に時間がかかる分、治療にも長い時間がかかり、数年から十年以上にわたる治療・服薬が必要とされる。



ハンセン病は、かつて癩(らい)病と呼ばれていた。癩(らい)病は、昔より毛穴から侵入する伝染病であるとする説や、仏罰による報いであるとする説などがあつた。江戸時代以降は家筋説＝遺伝説が広く信じられていたが、1873年(明治6年)にノルウェーのアルマウエル・ハンセン氏によってらい菌が発見されると、伝染病ということになってしまった。ここで、病気に対する理解の不足や差別・偏見が重なって、患者は社会から隔離される方向へ進んでいくことになった。

歴史の中のハンセン病

日本人がいつ頃から、どの程度ハンセン病に対する知識を得ていたのかは、文献が乏しいためはっきりとしたことは解らない。しかし720年に成立し、日本の最初の勅撰歴史書といわれる『日本書紀 卷廿二』にはハンセン病に関する記述がなされている。

廿年春正月…(中略)…夏五月五日、薬かかりす。羽田に集いて、相連れて朝に参趣る。其の装束、めん田の獵の如し。是の歳、百濟國より化來る者有り、其の面身斑白なり。若し白癩有る者か。其の人に異なることを悪みて、海中の島に棄てんと欲す。然るに其の人の曰く、若し臣の斑を悪まば、白斑なる牛馬は、國中に畜ふべからず。亦臣、小才有り、能く山岳の形を構る。其れ臣を留めて用ゐたまはば、則ち國の爲めに利有らむ。何ぞ空しく海島に弃てむ耶。是に於いて、其の辭を聽きて棄てず、及び須彌山の形及び吳橋を南庭に構らしむ。時の人、其の人を號けて路子工と曰ふ。亦芝耆磨呂と名づく。



この巻22は推古天皇の時代を書いたもので、飛鳥時代ということになる。従って20年とは西暦では612年を意味する。この当時、政府がどの程度ハンセン病に関する知識を有していたのかは定かではないが、『海中の島に棄てん』という句、つまり離島に島流しという意味だが、これは政府の関与を示している。また、同じ句から当時の日本人がハンセン病の伝染性を認識していたことがうかがえる。このことは大宝律令の注解書である『令義解』の一中、最後の句ではっきりする。以下は前述した『日本らい史』からの引用である。

悪疾とは白癩のことである。この病気は虫がいて、人の五臓を食べ、あるいは眉や睫毛が落ち、あるいは鼻柱が崩壊し、あるいは声が嘎れ、あるいは四肢が切断する。また、よく近傍の人に伝染するので、患者と同寝してはならない。さらにこの中で気になるのは、この文に『虫がいる』との記述がなされていることである。大辞林の虫の項にはこのようにある。

③人の体内に住む寄生虫や、ノミ・シラミ・シミなど。「一がわく」

④子供の体質が弱いために起こる病気。虫気。「瘡の一」

もし仮に③の意味で『虫がいる』と記したのであれば、この当時すでに日本人がハンセン病が何らかの寄生虫(実際にはハンセン病は細菌感染症である)によって引き起こされることを認識していた可能性がある。

あるいは④の意味において記述したとなれば、ハンセン病がより子どもが感染しやすい病気であると認識していた可能性も、場合によっては否定できなくなる。

無論、虫という単語の意味がこの当時と現在とでは異なっている可能性も否定はできないが、現在の意味において、虫という言葉を知った場合、この当時の日本人がハンセン病に対する相当の知識を(少なくとも医学的には)持っていた可能性がある。

ハンセン病患者は、何故差別されてきたのか

ハンセン病を引き起こすらい菌は、結核菌と近縁関係にある。しかし、結核が主に肺の中や骨、腸など体内で病気が進行するのに対して、手足や目・鼻・耳・頭髮など外見の目立つ部分に障害が現れるため、それだけ忌み嫌われ、偏見を生むことになった。



ハンセン病は慢性の病気で症状の進行は極めてゆっくりした病気で、必ずしも命を落とす病気ではなかった。治療薬のなかった昔でさえも、免疫力低下などによる他の病気を併発しない限り、つまりハンセン病だけが原因で死ぬことはあまりなかったといわれている。ただし、それがかえって長期間に

わたって外見上の障害が人々の目に触れることになり、一層の偏見と差別を助長することになった。そして、長い間病気の原因が分からなかったことも、差別を生み出す要因になった。その昔、癩(らい)病と呼ばれたハンセン病は、「業病」や「天刑病」と呼ばれ、「過去に悪いことをした報い」とか「天が罰している刑」などとされ、差別されてきたという。

そして、差別においては何よりも社会的な要因が強く働いていることを見逃してはならない。もともと、らい菌の感染力は、未だ培養が成功していないことから見ても極めて弱いものであり、仮に感染しても実際に発病する発症力は更に弱いとされている。その割合は他の感染症に比べて非常に低く、1000の感染につき発病に至るのは1例以下といわれるほどである。しかし、このような感染力が弱い菌であっても、体内の免疫系が弱っている状態、すなわち衛生状態や栄養状態が悪い状態にあれば、感染・発症する危険性は高くなってしまふ。

結局、もともと社会的に差別され、慢性的に飢餓や貧困に直面している人達がより高い確率で感染・発症することになり、社会的差別と病気の差別が複合的なものになり、決定的な差別になった。すなわち、ハンセン病に対する差別には、単に医学的な要因だけではなく社会的な要因も深く関わっていることを見逃すことが出来ないのである。

忍性と叡尊—救癩を目指して

日本では、光明皇后の悲田院や、文殊信仰や地藏信仰の影響から「救癩事業」は多数見られる。特に叡尊(1201~1277)や忍性(1217~1303)の救癩活動が有名で、中には西山光明院のように近代まで続いたものもあるが、残念ながら南北朝以降無くなる。その救癩活動だが、今日考えられるような、治療行為が主な活動ではなく、病人の極楽往生をかなえるために、念仏を称えさせたり臨終行儀のための行為であったとの指摘がある。また日蓮(1222~1282)は忍性たちの救癩を含めた慈善活動を「聖愚(しょうぐう)問答抄」1265年の中で、偽善的であると言っている。しかし、社会福祉という言葉もなかった時代、忍性たちの行動は一定の評価出来るものである。

叡尊

叡尊は大和出身。叡尊は、はじめ真言密教の僧で、その「戒律の教え」が忘れられているのを嘆いて「戒律」によって仏の道を見直そうと思うようになり、奈良の西大寺に入り「戒律復興」の活動にはいった。叡尊は、一般の人々にも目をむけ毎日の生活のなかに活かされる「戒律の教え」をわかりやすく、熱心に説いて回り、多くの弟子や信者を集めた。叡尊の教えはむやみに生き物を殺すことを禁じ、祈りを中心とする毎日の生活の中で厳しく自分自身を正し、仏の慈悲に縋って貧しい人や病に苦しむ人々を助けることを説いた。



忍性

忍性は、23歳のとき叡尊と出会い出家し、西大寺で本格的に修行をはじめた。忍性は自分は学問に向いてないと思い、仏の教えを実際の行いで示そうと心がけたと言われている。(実際、叡尊はガチガチの戒律を守る非常にまじめなタイプだったのに対して忍性は事業家としての色が強かったようだ)。大和の癩病者の救済施設として北山十八間戸(きたやまじゅうはっけんど)という現存する我が国最古の病院施設で、忍性が修行のかたわら救済をおこなった。叡尊の“鎌倉入り”より先に忍性は、「戒律」を関東に広めるため常陸国の御家人八田知家の菩提所(筑波山の麓)「三村寺



(正式には三村山清涼院三村寺)に留まり、布教活動をしていた。忍性はここから何度も鎌倉に出向き、「戒律」を説いて廻った。三代執権北条泰時の弟、重時の葬儀には導師を務め鎌倉の有力者たちとの交際が深まり、その後の忍性の活躍の場が大きく開かれた。忍性は、有力者の支援のもとに盛んな活躍を続けたが、自らは節約を守り、貧しい衣まとい、贅沢な食事をさけ、慈善事業や説教に勤めた。(叡尊は時頼が荘園を寄与しようとしたとき「そんなものは要らない」と断ったとあり無駄使いするなどしたのに対し、忍性はむしろ権力者と結んで資金を調達し、それによって現実の民衆を救おうという路線だったようだ)忍性は金沢の地には正嘉年中(1257年から8年)に頼朝が創建した浄願寺(のちの町屋町・龍華寺縁起)という寺に住んで戒律を広めた。文永6年忍性は、江ノ島で「雨乞いの祈祷」に成功し、「戒律」の僧のみならず真言密教の僧としても名声を高めた。

救癩の歴史

①光明皇后(奈良前期の聖武天皇の皇后)

※浴室を建てて貴賤を問わず入浴させ、千人のあかを落とそうと決意したが、千人目に癩におかされた男があらわれたので、ちゅうちょしたものの、勇を鼓してその体を洗い膿を吸ったところ、男は大光明を放って自分は阿しゅく仏であると告げたという(《宝物集》《元亨釈書》)

②叡尊(1201-1277)忍性(1217-1303)の救癩事業 →西山光明院・北山十八間戸

→収容者の極楽往生をかなえるために、念仏を称えさせたり臨終行儀のための行為を行なう。

ハンセン病・北山十八間戸・西山光明院をつなぐもの

癩(らい)病は、奈良時代には既に文献の中に登場していた。前述のように、8世紀に完成した「日本書紀」に、『白癩』の者が渡来した」とある。けれども、ここでいう「白癩」には、いわゆる癩(らい)病=ハンセン病だけではなく、その他皮膚病一般の病気も含まれていたとされている。12世紀の「今昔物語集」には、「比叡山の僧侶が法会(ほうえ)を妨げ、尊い僧にたいして嫉妬した報いとして『白癩』となり、周囲から穢れた者として排斥され、京都の清水坂の庵に入って間もなく死んだ」という話が記載されている。このことから、癩(らい)病を患う者は差別の対象とされて忌み嫌われていたことがうかがわれる。癩(らい)病に感染したことが分かると、その人は故郷を追われ、放浪の民となることが少なくなかった。「癩者」は非人として扱われたのである。そのため、彼らは物乞いで生計を立てるほかなかった。ある者は



寺院で施しを受けて生活した。1260年代、般若寺に付随して建てられた「北山十八間戸」は、間口1間ずつ18の部屋が並び、東の端の大間には仏壇がある。1567年戦火に焼かれ、江戸時代初期、今の場所に当時の姿で再建されたという。

北山十八間戸

鎌倉時代、忍性により建てられた慈善救済施設で、ハンセン病患者を収容し、その施療にあたった。「悲田院・施薬院」は、奈良時代、光明皇后により建てられたもの。



西山光明院について

鎌倉時代には、律宗の僧叡尊(えいそん)・忍性(にんしょう)が奈良に集まる「癩者」を救済したとされている。薬師寺の近くには西山光明院が設けられ、薬師寺の保護のもと「癩者」がそこに収容されていた。また、忍性は鎌倉の極楽寺でも「癩者」の救済を行っている。

- ① 北山十八間戸に対して西山光明院も癩者を救済してきた
- ② 創始者は不明。行基菩薩が創始して、忍性等が関係したものと考えられる。
- ③ 薬師寺の非田院の一部として発達してきたものようである。

- ④ 癩者は昔より豊富な寺領により生計の資をえたと考えられるが、寺領が没落して以後は国中を勧進した。明治維新以後、勧進が禁止されたので、急速に窮迫した。西山光明院は北山よりも経済的に恵まれていたようで、北山より西山光明院の方が長く存在したと考えられる。(宮川 量「飛驒に生まれて」より要約)



西山光明院推定跡地？より薬師寺を臨む

西山光明院は、大正時代までハンセン病患者が居住していたという記録がある。しかしながら、いまは跡形もない。

まとめにかえて一人権の視点から差別を考える

忌避や排除、抑圧のない生きよい社会を築くためのキーワードとなるのは人権であると思われる。お互いの尊厳を認めあい、人権を尊重しあうような地域社会を形成するには、人々が作り出す関係のなかで人権を考えていく必要がある。

- ① 人権のイメージの再点検：「人権」は“人が生まれながらにして持っている権利か？”

人権というものが私たちの体内に自然と備わっているわけではない。人権とは、より豊かで安全な暮らしを実現していこうとする努力のなかで、人々が互いに合意して認めあってきたものであり、私たちの関係を表わす概念のひとつとしてとらえる必要があるのではないだろうか？

人と人の関係は絶えず変容していくものであるから、こうした変容に応じて人権に新しい意味を付与し、再構築する努力が必要である。この努力を怠った時、人権は危機に直面するのではないだろうか。

② 自由権・社会権から新しい権利へ一歩は時代の変化の中で、人権概念を豊かにしてきた。人権の歴史を学んでみると、新しい意味付与や再解釈によって人権概念がしだいに広がってきた様子を確かめることができる。18世紀から19世紀にかけて自由権が確立し、19世紀から20世紀にかけて社会権が認められるようになった。そして20世紀後半から“新しい権利”が生まれて来た。

③ 地域社会のなかの人権と差別

地域社会は、「一定の地域的範囲の上に、人々が住む環境基盤、地域の暮らし、地域の自治の仕組を含んで成立している生活共同体。コミュニティ」（広辞苑）と定義されることがある。これは、地域社会の共同性（相互の協力や扶助など）に注目しているが、一方で地域社会は、仲間内と認めない他者に対して、交流を避けたり、さげすんだりするような意識や行動を醸成する側面も持ち合わせている。その一つが差別意識であり、差別なのだ考える。



④ 差別を乗り越えるとは、

☆大正11年9月11日奈良県水平社第1回委員会決議の理由

人間が人間を尊敬しうるの権利の主張を唯一の義務とする水平運動の過渡期に於いて頻々たる差別事件の惹起するは当然であらねばならぬ、何故ならばそれは今や自覚せんとしつつある吾等に比して世人が余りに頑迷だからである。かくの如く彼等が今尚不合理なる因習に囚われて賤視観念を抱懐するものとすれば、より解放されるべきは寧ろ自覚せざる彼等ではあるまいか（下略）

※地歴部へのお誘い

地歴部は、活動のフィールドを往馬谷に据え、その歴史を中心に調べています。一緒に活動してみませんか。

※解放研へのお誘い

「人権って」「人権について考えよう」「人権をまもるって、」
人権について、考えてみませんか！

① 生駒神社については以下のHPより引用、作成した

<http://www.kamnavi.net/as/ikoma/ikomatu.htm>

② ハンセン病については以下のHPより引用、作成した

<http://www.asahi-net.or.jp/~hn7y-mur/mononoke/monolink04.htm>

<http://www.mognet.org/hansen/20030426tanahara02.html>

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/kobako/hannsen02.html>

③ 叡尊・忍性については以下のHPより引用、作成した

http://www2.justnet.ne.jp/~ajo/rekishi/database/syom_h/syomyo/obosan.htm

④ 薬師寺の写真は以下のHPより引用した

<http://www.nara.accu.or.jp/chdb/heritage/yakushi.html>

⑤ 「まとめにかえて」、は奈良県立同和問題関係史料センター、井岡康時さんの部落史学習講座資料より作成した。記して謝意を表す。

生駒高校地歴部・解放研